

# 入学前教育の効果と大学教育への接続に向けた課題 —「学問サキドリプログラム」を事例として—

吉本 博明<sup>1)</sup>\*・紺谷 靖英<sup>1)</sup>・岡崎 善三<sup>1)</sup>・長田 隆<sup>1)</sup>・矢野原 泰士<sup>1)</sup>・  
永田 さやか<sup>1)</sup>・中瀬 昌之<sup>1)</sup>・黒田 年洋<sup>2)</sup>・赤木 裕美<sup>3)</sup>・山田 裕司<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>南九州大学健康栄養学部食品開発科学科

<sup>2)</sup>南九州大学入試広報課

<sup>3)</sup>南九州大学学務部

<sup>4)</sup>南九州大学人間発達学部子ども教育学科

## Issues on Pre-Entrance Education for the High School-University Connection to University Education: A Case Study of the "Academic SAKIDORI Program"

Hiroaki Yoshimoto<sup>1)</sup>\*, Yasuhide Kontani<sup>1)</sup>, Zenzo Okazaki<sup>1)</sup>, Takashi Osada<sup>1)</sup>,  
Yasushi Yanohara<sup>1)</sup>, Sayaka Nagata<sup>1)</sup>, Masayuki Nakase<sup>1)</sup>, Toshihiro Kuroda<sup>2)</sup>,  
Hiromi Akagi<sup>3)</sup>, Hiroshi Yamada<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>Department of Food Science and Technology, Faculty of Health and Nutrition, Minami Kyushu University

<sup>2)</sup>Public Relations office, Minami Kyushu University

<sup>3)</sup>Student Affairs Office, Minami Kyushu University

<sup>4)</sup>Department of Child Education, Faculty of Human Development, Minami Kyushu University

It has been pointed out that there is a difference in the academic ability of students between the different types of entrance examinations, i.e., school recommendation type entrance examinations and comprehensive type entrance examinations, which determine early admission, and general entrance examinations. Therefore, many universities are providing pre-entrance education to supplement the academic abilities of students who enter early. In this study, we conducted a trial of the "Academic SAKIDORI Program" developed by Shinken Ad, Inc. as a pre-entrance education program for early entrants scheduled to enter in 2022. In order to verify the effectiveness of the program, we asked non-takers to take the "Pre-Entrance Point Check" developed by the company, and compared the learning literacy of students who took the early entrance examination and those who took the general entrance examination. The results showed that while early entrants were lower in "visible academic ability," meaning basic knowledge, participants tended to be higher in "invisible academic ability," meaning attitude toward learning and motivation to learn. The results suggest that the "Academic SAKIDORI Program" is a program that improves the learning motivation of early entrants to the program.

**Keywords:** academic literacy, learning motivation, pre-entrance education

### 本研究の背景

#### 1. 大学入学者選抜の多様化による多様な学生の入学

中央教育審議会は2014年、答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(以下、「高大接続答申」)を取りまとめ、未来を見据えた高校教育と大学教育、大学入学者選抜の一体的改革を推進してきた。この背景には、「初等中等教育から高等学校まで一貫した、これからの時代に求められる力の育成」<sup>(1)</sup>を目指す

べき方向とし、戦後から続いてきた学力に対する議論(「ゆとり」か「詰め込み」)から、学力の三要素から構成される「確かな学力」の育成に向けて学校教育改革が大きく舵を切ってきたことがある。しかし高等学校は「小中学校に比べて知識伝達型の授業に留まる傾向」<sup>(2)</sup>がある。

こうした高等学校の傾向は、大学入学者選抜にひとつの要因がある。例えば、一般入試ではあらかじめ設定された正答に対する知識を問い、一点刻みで受験者を選抜する評価を継続している。さらに、AO入試や推薦入試においても「多くが本来の趣旨・目的に沿ったものとなっておらず、単なる入学者数の確保の手段」(文

\*連絡著者:E-mail:h-ysmt@nankyudai.ac.jp

部科学省 中央教育審議会, 2014)となり, 現行の入学者選抜が学力の三要素に対応したものになっていないのである。

さらに, 2000年以降の大学数の増加に伴って, 大学進学率も上昇し, 学力や知識, 価値観など多様な学生が入学するようになってきた。大学, 特に地方の小規模大学には高等教育レベルの学力や知識を完全に習得していない学生も入学するようになってきた<sup>(9)</sup>。こうした学生の状況を踏まえて, 大学は高等学校の教育内容との接続を図るため, 入学前の高校生や入学後の学生に対してリメディアル教育(学習・学修支援)を組織的または個別に行い, 大学教育で学ぶための学力・知識の補習や学習意欲の向上を図っている。

## 2. リメディアル教育の展開

山本は1999年に全国の大学を対象とした調査を実施し, リメディアル教育を4類型している(山本, 2001)。すなわち, (1)高等学校までの教科教育復習型, (2)大学での学習活動の入門型, (3)大学専門課程受講前の専門知識の導入型, (4)入学前教育の4類型を抽出した。(1)は, 「未履修, または学力不足と判断された高等学校教育課程の教科・科目について大学で行う補完授業」を指し, (2)は, 「専門教育(ゼミナール・研究室等)の活動に必要な学習スキルを教授するもの。例えば文章表現, 議論の進め方, 報告・プレゼンテーションの方法, 文献・資料の探し方, パソコン・ネットワーク操作など」, (3)は, 「『高等学校までの教科教育復習型』と異なり, 高等学校の指導要領外でかつ大学の専門教育に必要な学力や知識を講義するもの。いわゆる従来的一般教養ではなく, 近年学生の学力低下に伴って設置された教育課程を指す」とし, (4)は, 「入学手続きをした合格者を対象にレポート提出や集中講義など入学前に実施する教育を指す」と報告している。(4)の「入学前教育」とは, 「主にAO入試や各種の推薦入試など, 早い時期に合格発表が行われる入試により大学入学が決まった人に対し, 大学入学後の学習のための準備として入学前にあらかじめ行われる教育」を指す(日本私立学校振興・共済事業団, 2014)。

2000年以降, リメディアル教育を行う大学は増加し, 2021年度を取組状況は81.8%(472校)の私立大学が実施し, 全学的に組織的に取り組んでいる大学は60.0%(346校)であり, 多くの大学で実施されている<sup>(4)</sup>。このように, 入学者の学力・知識の多様化, さらに高等学校との接続の強化に向けて, 各大学は初年次教育を組織的および個別に実施し, 入学者の質を保証するようになってきた。

## 3. 学力の3要素と入試改革

中教審答申(2014)以降の『大学入学選抜実施要項』(文部科学省, 2022)には, 「能力・意欲・適性等の評価・判定に当たっては, (中略)…学力の三要素を適切に把握するように十分に留意すること」, さらに, 同答申(2014)には「本答申の理念に基づく高大接続改革は, (中略)…各大学が実施する個別選抜全体において実現されなければならない」と記載されている。つまり, 高

等学校までに培ってきた「生きる力」や「確かな学力」を多面的・総合的に評価する大学入学選抜の実施や, 高校生の多様性を踏まえた学力という一つの物差しではない, 多元的な評価の導入が求められるようになってきたのである。

各大学の個別選抜改革を推進するために, 「学校教育法施行規則の一部を改訂する省令」を2016年3月に公布し, 2017年4月から施行した。これにともない, 全ての大学は三つのポリシー(「入学者の受入れに関する方針」「教育課程の編成および実施に関する方針」「卒業の認定に関する方針」)を策定し公表することが義務付けられた。また, 「高大接続改革実行プラン」(2015)の入試区分の見直し方針に基づいて, 2021年度入試からAO入試や推薦入試を廃止し, 総合型選抜, 学校推薦型選抜として, 学力試験を重視する一般試験と高校が推薦する学生を受け入れる学校推薦型入試との差別化を図るようになった(文部科学省, 2015)。

入学選抜の区分の見直しは, これまでのAO入試で批判されてきた学力不問という点を改善し, 高校生の知識や思考力・表現力, 学びに向かう姿などを多面的に評価するようになった<sup>(6)</sup>。

以上のように, 大学入学選抜は高大接続答申以降, 多様化する受験生ならびに入学者に対応するため, 入学前および入学後のリメディアル教育や, 入学選抜の多面的・総合的な評価に取り組むようになった。

## 4. 大学の量的拡大と学生確保

1990年代以降の大学は教育機関の増加とそれに伴う学生数の増加, さらに, 大学設置基準の大綱化に伴う学部・学科名称の多様化とそれに伴う教育課程の改組など, 多くの大学が教育改革を推進してきた。本節では, 大学の量的拡大と質的拡大, 多様化する学生の受け入れを担ってきたAO(アドミッション・オフィス)入試について歴史的背景と現状を考察する。

### 1) 大学教育の量的拡大に伴う質的变化

文部科学省「学校基本調査 令和3年度」によると, 高等学校卒業者の54.9%が大学に進学し, 前年度から0.5ポイントと上昇して過去最高になった。大学進学率の経年変化を見ると, 1972年に18歳人口の21.6%が進学するようになり, 1994年に30.1%, 2002年に40.5%, 2009年に50.2%が進学している。進学率が20%から30%に上昇するために要した年月が22年間かかったことに対して, 30%から40%は8年間, 40%から50%は7年間と, 1990年代からの20年間に進学率が2倍以上(25.6ポイントの上昇)になっている。この背景には, 私立大学数の増加が一つの要因になっている。全国の4年制大学数は, 1990年度の507大学(国立96校, 公立39校, 私立372校)から, 2000年度649校, 2010年度778校(国立86校, 公立95校, 私立597校)と, 公立大学が56校(2.4倍)増加, 私立大学が225校(1.6倍)増加している。大学数の増加に伴って受入学生数も, 国立大学が1990年度から2010年度の20年間で約11万人増加, 公立大学が約8万人増加, 私立大学が約76万人増加している。なお, 2010年度入学者の73.4%が私立大学に在籍している。

このように1990年代以降, 大学数(特に私立大学)が

急速に増加し、それに伴って進学率が上昇した背景には、大学設置基準の大綱化(1991)がある。大学設置基準の大綱化によって、大学は従来の旧制大学が使用してきた学部名称を教育研究内容に応じたものに変更することができるようになり、さらには、卒業単位数に関する科目区分等が廃止されて各大学が自由に設定できるようになった。その結果、各大学は教育研究の特色を打ち出すために、既存学部の学部・学科名称等の改組や学部等の新設を行うようになり、1990年度の99種類から2016年度は502種類と、26年間で5倍以上に増加している(寺田, 2020)。

大学数・入学定員の増加に伴い進学率が上昇し、量的側面から大学教育はユニバーサル化を果たした。マーチン・トロウはユニバーサル化(ユニバーサル段階)した大学の特徴を次のように示している(Trow, 1976)。トロウは「学生の数の増加は同時に、出身階層その他の属性、動機づけ、意欲、興味、卒業後のキャリアなどについて、学生の多様化」が進み、その結果、大学は「学生の多様化を反省した教育条件、すなわちカリキュラムや教授法などの多様化を迫られる」と指摘している。

1990年代から2000年代の大学は量的・質的の両側面から多様化に対応してきた。こうした中、大学は学力、知識、学習意欲、学習目的、さらには価値観等の多様化した学生が入学するにあたり、大学入学前教育<sup>6)</sup>を実施するようになった。入学前教育の実施状況については、(岡田, 2021)が1990年代半ばから「入学者の履修歴等を背景とした補習授業」と、「AO入試を経た合格者に対する学習動機の維持を促す教育」を中心に始まり、2010年代には文部科学省から各大学に実施の要請が強まっていることを明らかにしている。

2) AO入試の全国展開

個性、適応性、意欲や関心という評価項目を用いて、総合的・多角的な判断のもとに、学生の能力を評価する入試形態が浸透してきた。大学側も、受入学生の間口を学力や知識という基準から学生受け入れの間口を絞ってきたこれまでの入試を見直し、受験生の確保という視点からAO入試の導入に踏み切った。共通第一次学力試験導入前の1978年度と1997年度の大学入試を比較すると、選抜方法が多様化していることが分かる。

表1に第2次答申(1997)「第2章 大学・高等学校の入学者選抜の改善」の本文中の記載からデータを引用した。

中央教育審議会(1996)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第1次答申)」において「子供たちが、それぞれ将来、自己実現を図りながら、変化の激しいこれからの社会を生きていくために必要な資質や能力を身に付けていくという視点から(中略)これからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようとして、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を[生きる力]と称することとし、これらをバランスよ

表1 選抜方法による受験者数の推移

大学入試:国公立大学		
面接	1978年度	1997年度
	35.0%	91.9%
小論文	33.3%	93.9%
リスニング	7.5%	35.1%
特別選抜:国公立大学		
推薦入学	1978年度	1997年度
	32.5%	83.8%
帰国子女	0.8%	68.2%
社会人	0.0%	41.9%
特別選抜:私立大学		
推薦入学		1996年度
		97.4%
帰国子女		54.1%
社会人		48.2%

第2次答申(1997)「第2章 大学・高等学校の入学者選抜の改善」から著者ら加筆作成

くはぐくんでいくことが重要である」として、[生きる力]を示している。さらに、これからの学校教育の目指す方向として「子供たちを、一つの物差しではなく、多元的な、多様な物差しで見、子供たち一人一人のよさや可能性を見だし、それを伸ばすという視点を重視する」ことを指摘している。

第2次答申(1997)ではAO入試が提唱され、それを契機に、AO入試が全国展開するようになった。その背景には、「過度の受験競争は、(中略)受験のための知識を詰め込むことに偏らせる傾向を招き、自ら学び、自ら考える教育への転換を図るというこれからの学校教育が目指す方向性との乖離を少なからず生じさせる」ため、現状の学力検査に小論文や面接などを取り入れるとともに、「入学者の能力・適性等を多面的に判定することが重要である」とし、大学入学者選抜の改善を提唱している。改善の方向は、「学力試験を偏重する入学者選抜を改め、能力・適性や意欲・関心などを多角的に評価するため、選抜方法の多様化、評価尺度の多元化に一層努めることが必要」とし、選抜方法の多様化、評価尺度の多元化を述べている。

こうした背景を受けて、学力・知識を重視しない選抜方法のひとつであるAO入試の入学者割合は、2000年度の1.4%から10年後の2010年度には8.8%、2020年度には10.9%と増加している。私立大学に限定すると、2000年度は1.7%、2010年度は10.5%、2020年度は13.5%である。さらに、学力・知識を重視しない選抜方法には、学校推薦や指定校推薦等の選抜方式がある。AO入試による入学者と推薦入試による入学者の推移は、2000年度38.9%、2010年度51.4%、2020年度56.5%と増加傾向にある<sup>7)</sup>。

以上のように、大学(特に私立大学)はAO入試と推薦入試を活用して、早期に学生数の確保を行うと同時に、学生数の増加と多様化による大学教育の質の変化に直面するようになったのである。

リメディアル教育4類型：山本(2001)

①高等学校までの教科教育復習型	補完授業
②大学での学習活動の入門型	大学での学びのスキル
③大学専門課程受講前の専門知識の導入型	大学の専門教育基礎
④入学前教育	合格者対象



【入学前①】高等学校までの教科教育復習型
【入学前②】大学での学習活動の入門型
【入学前③】大学専門課程受講前の専門知識の導入型
【入学後④】高等学校までの教科教育復習型

(注) 岡田(2021)、山本(2001)をもとに筆者ら作成

図1. リメディアル教育の新4分類

## 5. 大学教育の質保証にむけて—入学前教育

山本がリメディアル教育を4類型に分類して20年以上が経過した(山本, 2001). 図1に, 実施時期とその内容によって4つに再分類した著者らの分類を示す<sup>6)</sup>. 現在, リメディアル教育は入学前と入学後に実施されている. 各大学に応じて組織的および個別的な対応であるのか, 入学予定者に向けていつから取り組むのかなど異なっている. しかし, 実施内容には図1のように, 入学前は「【入学前①】高校までの教科教育復習型」「【入学前②】大学での学習活動の入門型」「【入学前③】大学専門課程受講前の専門知識の導入型」の3パターンに類型化することができる. また, 入学後は「【入学後④】高等学校までの教科教育復習型」を入学前から継続, もしくは入学後から取り組む大学はあるが, 【入学前②】の大学での学習活動の入門型や, 【入学前③】大学専門課程受講前の専門知識の導入型については, 初年次教育や専門基礎科目, 教養教育科目などにおいて取り組んでいる.

## 研究の目的と方法

### 1. 本研究の目的

選抜方法の多様化, 評価尺度の多元化によるAO入試の全国的な拡大に伴い, 多様な生徒が入学してくる現状に鑑み, リメディアル教育の重要性が増している. そこに求められる内容も, 教科教育復習型から専門知識導入型まで多様な内容が実施されている. これら多様な生徒の入学後の学習成果を把握するには, 個別の生徒の多面的な情報を把握する必要がある. 特に, 学力, 能力・適性, および意欲・関心など多面的な情報の蓄積が不可欠である.

大学への入学者は何らかの学習意欲をもち, 入学後の学びを展開している. 健康栄養学部を志望する生徒は, 大学での食に関する全般的な学びや, 食品科学という専門分野に対して関心をもっている. この入学前の関心を入学後も持続させるためには, 入学前に提供する学びの質が重要であるとの仮説を立てることができる.

本研究ではこの仮説を検証するために, 株式会社進研アドが開発した「学問サキドリプログラム」<sup>9)</sup>を導入し, 受講者, 非受講者の学修リテラシー(「見える学力」, 「見えない学力」後述)の差異を検討し, その効果について考察する.

### 2. 南九州大学における入学前教育の課題と「学問サキドリプログラム」の導入

南九州大学健康栄養学部食品開発科学科(以下, 「食

品開発科学科」)は, これまで学科教員が作成したプリント課題による入学前教育をおこなってきた. 科目は, 「生物学」「化学」「数学」「食品学」「食品科学英語」の5科目で, 高校までの基礎的な知識を復習するものである. 提出された課題は, 作問担当教員が添削しフィードバックをおこなっていたが, 入学後の学修への影響を分析するに足る十分な情報は得られていなかった. なかなく, 学生の学修モチベーションに寄与したのか否かの分析をすることはできなかった.

これまでの入学前教育実施に対する実施状況や入学後の学生の観察から, これまでのプリント課題による基礎的な知識の復習のみでは, 入学者の入学後の学修成果を向上させることはできないのではないかと課題が顕在化した. そこで, 基礎学力の確認ならびに補完のみならず, 入学前までに必要とする自ら学ぶ力の育成, 学習モチベーションの維持等を企図して設計された株式会社進研アドの「学問サキドリプログラム」を導入し, プログラムの実効性を検証することとした.

### 3. 「学問サキドリプログラム」および「入学時ポイントチェック」の概要

「学問サキドリプログラム」(以下, 「サキドリP」)は, 接続を円滑に進めるための入学前教育プログラムで, 図1に示した【入学前①】と【入学前②】を目的に株式会社進研アドが開発したものである. 学問系統別教材で入学者の興味を喚起し, 入学後に必要となる主体的な学習を先行体験できるように設計されている.

テキストは, 『スタートBOOK』(学問サキドリプログラム, 2020a)と呼ばれる導入用テキストと『パワーアップBOOK』(学問サキドリプログラム, 2020b)と呼ばれる入学後に必要となる基礎教科のセットから成る. 今回, 「食品開発科学科」では, 『スタートBOOK』に『学ぶ力の基礎』を, 『パワーアップBOOK』に『生物ベーシック』1科目を選択した.

「サキドリP」受講中のオンラインデータや受講後のデータによって, 学力の観点からは課題の得点を活用し, また, アンケートによる高校時代の履修科目調査等によって, 高校までの範囲のつまづき, 基礎学力不足や学習方法の理解不足など学力に対するケアが必要な学生の早期把握が可能である.

学習力という観点では, それぞれの課題の提出状況, すなわち期日内に課題を提出したか否かで取り組む姿勢や計画性, アンケートによる高校までの学習状況調査から計画的な学習の定着度, 高校までの学習姿勢や学習時間の状況が把握できる. 学習モチベーションについては, アンケートによる入学満足度, 学問への関心度, 大学生活への不安度調査の結果から, 意欲および専門領域への興味関心を把握し, 中途退学の可能性

がある学生の早期把握が可能である(株式会社進研アド, 2022b).

入学時ポイントチェック(以下、「ポイントチェック」)は、「サキドリP」の学修リテラシー調査部分の一部を抜き出したもので、簡易に学修リテラシーを計測することが可能である(株式会社進研アド, 2022a).

#### 4. 実施方法

「サキドリP」受講者, 非受講者および「ポイントチェック」受検者の内訳を図2に示した。食品開発科学科2022年度入試合格者42名のうち、受講者は、早期に合格した学校推薦型選抜I期12名および総合型選抜I期1名の合計13名(31.0%)を選定した。非受講者29名に、「ポイントチェック」受検の案内を送付し、うち20名(47.6%)が、ポイントチェックを受検した。うち9名(21.4%)は、「ポイントチェック」の案内はしたものの不参加であった。

「サキドリP」受講は、2021年12月8日から2022年3月6日に実施された。「ポイントチェック」は、2022年4

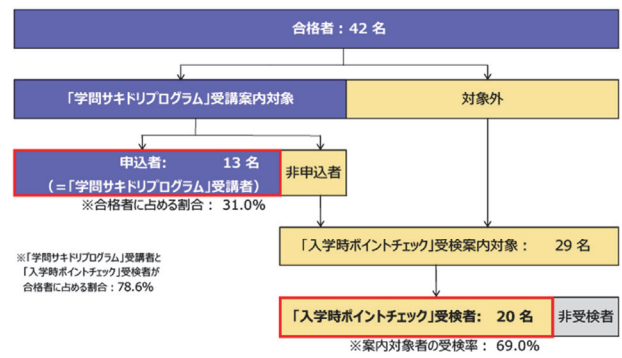


図2. 「サキドリP」受講者と入学時ポイントチェックの内訳  
出典: 進研アド 学問サキドリプログラム受講結果報告データ

月11日から18日に実施された。

本研究において、受講者と非受講者の比較にあたっては、「サキドリP」受講者と「ポイントチェック」受検者

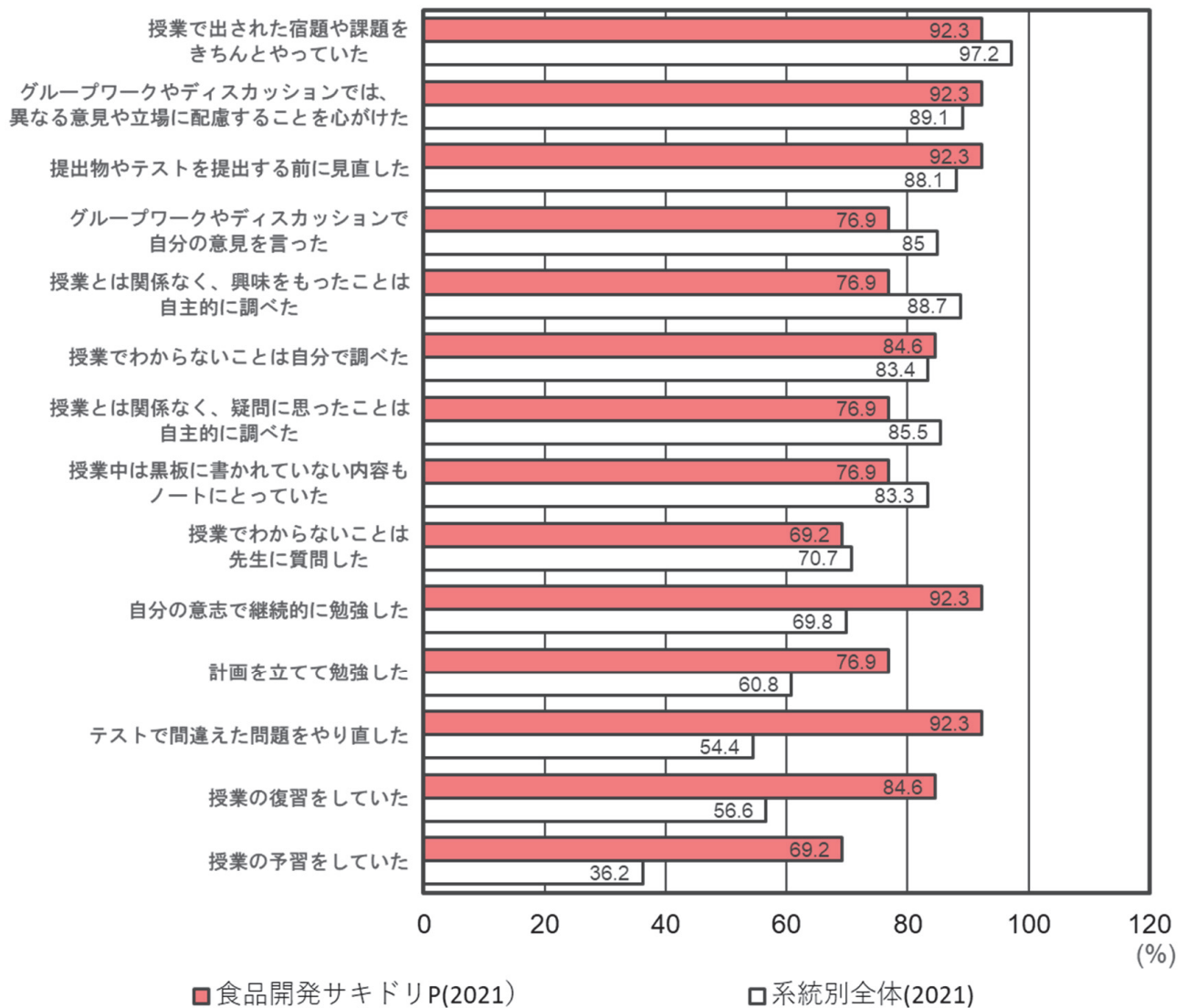


図3. 高校時代の学校や家での学習の様子

食品\_サキドリP(2021)n=13, 系統別全体(2021)n数非開示

(注) グラフ内の数値は、「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」の計である。

出典: 進研アド 学問サキドリプログラム受講結果報告データ

を比較した。また、一部のアンケート結果については、全国平均との比較をおこなうために、本学と学問系統が類似した学科(対象大学等は非公開)の2021年度の系統別全国平均データ(n数は非開示)を株式会社進研アドから提供を受け参考とした<sup>(10)</sup>。

受講者および非受講者のGPAデータは、入学後の1年前期のデータを使用した。個人データについては、受講者および非受講者をコード化し各データ取り扱い担当者間で個人が特定できないようにプライバシーに配慮した。GPA等成績データの取り扱いについては、「学校法人南九州学園学生等に関する個人情報の保護に関する規程」、株式会社進研アド「個人情報取扱要領」等に基づき同意を得るとともに適切に処理した。

## 結果と考察

### 1. 「サキドリP」受講者の高校時代の学習態度

高校時代の平日学習時間に関する受講前アンケートの結果、受講者の学習時間は、2時間以上が46.2%で系統別全国平均38.4%より多いものの、一方、ほとんどしないと答えた者が23.1%と系統別全国平均の18.9%より多く、半数の学生は学習習慣が定着していると考えられた。

図3に個別の学習態度に対する受講前アンケート結果を示した。系統別全国平均と比較して、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した者のうち、受講者が5ポイント以上高かった項目は、「授業の予習をしていた」「授業の復習をしていた」「テストで間違えた問題をやり直した」「計画を立てて勉強をした」「自分の意志で継続的に勉強した」「提出物やテストを提出する前に見直した」であり、大学での学びに必要な力(問題解決力、自己管理能力)をもっているといえる。

以上から、「サキドリP」受講者の傾向として、次の3点を抽出することができる。第1に「授業で出された宿

題や課題をきちんとやっていた」、「提出物やテストを提出する前に見直した」「計画を立てて勉強した」という自己管理能力を身につけている点である。第2に「授業でわからないことは自分で調べた」「授業で分からないことは先生に質問した」「授業とは関係なく、疑問に思ったことは自主的に調べた」「授業とは関係なく、疑問に持ったことは自分で調べた」という情報リテラシーや論理的思考力、第3に「授業の復習をしていた」「テストで間違えた問題をやり直した」という問題解決力といった能力を身につけていることが明らかとなった。こうした能力は学士力の汎用的技能、態度・志向性にも挙げられているように、学士課程教育における学習成果の一つである。

「サキドリP」を受講することにより、入学前の生徒が身につけている能力と学士力との対応性を見いだすことができた。また、今後はこうした情報を基に、「サキドリP」受講者の個別指導や入学後の変化について継続的に点検・評価することで、「サキドリP」受講者の学士教育プログラムに及ぼす教育効果を点検・評価することができると考える。



図4-1. 「サキドリP」における学修リテラシー概念図1  
出典:進研アド 学問サキドリプログラム受講結果報告データ

	Pillars	Metrics	グレード判定
学修リテラシー	見える学力	入学後の学びに必要なとなる全学科共通の汎用的基礎学力	過去のテストの回答傾向から、グレードI~IVに分類
		学問系統別に必要な学力	
学修リテラシー	見えない学力	主体的に学ぶ姿勢・習慣	過去のアンケートの回答傾向から、グレードI~IVに分類
		学びのモチベーション	

図4-2. 「サキドリP」における学修リテラシー概念図2  
出典:進研アド 学問サキドリプログラム受講結果報告データ

2. 「サキドリP」導入による学力の可視化

「サキドリP」において株式会社進研アドは、個々の生徒の学力をスコア化して学生の学修リテラシーを把握することを提案している(図4-1, 4-2)。すなわち、学修リテラシーを「大学の学びを理解し、自ら深め、主体的に学び続けるための基礎力」と定義し(株式会社進研アド, 2022b)、これらは「見える学力」と「見えない学力」から構成され、前者は、「①大学の学びに必要な汎用的基礎学力」および「②専門分野の学びに必要な基礎学力」が、後者には、「③主体的に学ぶ姿勢・習慣」、「④学びのモチベーション」が該当するとする。これらそれぞれの学力を基礎テストおよびアンケート調査によってスコア化し、「見える学力」および「見えない学力」をそれぞれ4つのグレードに分類する。

「見える学力」のグレードは、「Ⅰ:大学の学びに必要な基礎力が備わっており、専門分野に関連する基本的な事項を理解できている。」「Ⅱ:基本的な知識を習得する力はあるが、学びを深めるための力にやや不足がみられる。特に図表読解など、正しく情報を読み解くことを苦手とする学生が多い。」「Ⅲ:全体的に基礎力が低い。半数が10行程度の短い文章の要点を正しく理解できない。」「Ⅳ:基本的な語彙を知らない、割合や時速の計算が正しく行えないなど、大学での学習の前提となる基礎的な学力が不足している」と定義している。

「見えない学力」のグレードは、「Ⅰ:大学の学びへの高い意欲を持ち、自ら目標を設定し、自律的に学習を進めることができる。」「Ⅱ:大学の学びへの意欲があり、基本的な学習習慣も持ち合わせている。」「Ⅲ:大学の学びへの意欲がやや低く、受動的な学習姿勢の学生が多い。目の前に迫るものがないと、最低限必要な学習を後回しにしてしまう可能性がある。」「Ⅳ:大学の学びに対する意欲が低く、基本的な学習習慣にも不安がある。1人ではなかなか学習を進めることができず、躓いたままついていけなくなってしまう可能性がある。」と定義している。

いずれの学力グレードにおいても、Ⅲ以下のグレードは、大学教育現場において問題となる学生像が想定されており、これらの学生の早期把握とこれらの学生を対象とした追加的プログラムが学生の満足度向上に寄与するものと思われる。これら二つの学力と4つのグレードは、type  $\alpha$ 、type  $\beta$ 、type  $\gamma$ 、type  $\delta$  の4象限に分類され可視化される(図5)。

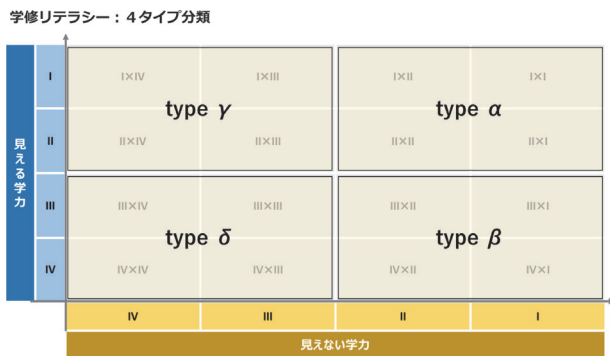


図5. 2つの学力と4つのグレードによるtype分け  
出典:進研アド 学問サキドリプログラム受講結果報告データ

3. 「サキドリP」受講者および「ポイントチェック」受検者の比較

図6に、「サキドリP」受講者(受講後)と「ポイントチェック」受検者(年内入試および一般入試)のグレードマッピング結果を示した。全学生の「見える学力」と「見えない学力」の相関係数は0.1032で、両者に相関関係は見られなかった。

「サキドリP」受講者と非受講者との比較では、「サキドリP」受講者(赤色●)の「見える学力」は、一般入試受験者(白色□)と比較して低い傾向であったが、年内入試(推薦および総合型入試;白色○)との明確な差は認められなかった。一方、「見えない学力」、すなわち、主体的に学ぶ姿勢やモチベーションにおいては、年内入試および一般入試と比較してもやや高い傾向が観察された。これは、「サキドリP」受講による大学教育に対する適切な導入教育がなされ、特に「見えない学力」の向上が図られた結果と考えられる。

いずれの学力においてもグレードⅢ以下であるtype  $\delta$  の象限には、「サキドリP」受講者が1名、年内入試(推薦および総合型入試)3名が該当した。また、「見えない学力」においては、「見える学力」は高いものの、「見えない学力」が低い一般入試受験者が2名含まれている。

上記の結果から、資質・能力3つの柱「①知識・技能」「②思考力・判断力・表現力」「③学びに向かう姿」のうち、「③学びに向かう姿」において「サキドリP」受講者に高い傾向が観察された。

「③学びに向かう姿」、すなわち「見えない学力」を計測するアンケート結果を図7に示した。「見えない学力」のうち、「③主体的に学ぶ姿勢・習慣」については4問のアンケート項目が、「④学びのモチベーション」については、3問のアンケート項目が設定されている。

「サキドリP」受講者と「ポイントチェック」受検者を比較すると、すべての項目において、「サキドリP」受講者の平均が高かった。特に「③主体的に学ぶ姿勢・習慣」においては、入学前の継続的学習が「サキドリP」受講者92.3%に対して、非受講者が50.0%、計画的な学習が、受講者69.2%に対して、非受講者45.0%であった。これ

学修リテラシー4タイプ分類

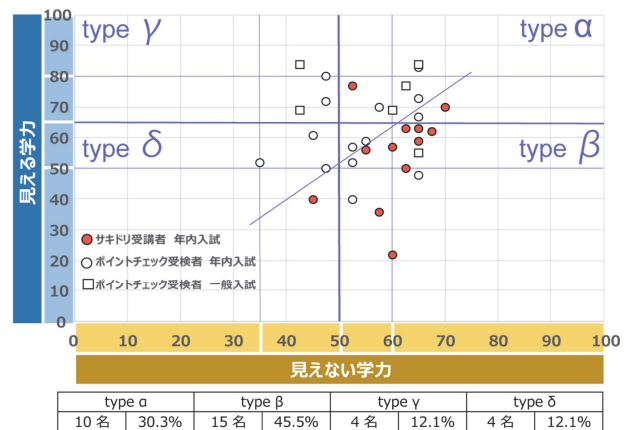


図6. 「サキドリP」受講者および非受講者のtype分け  
出典:進研アド 学問サキドリプログラム受講結果報告データ

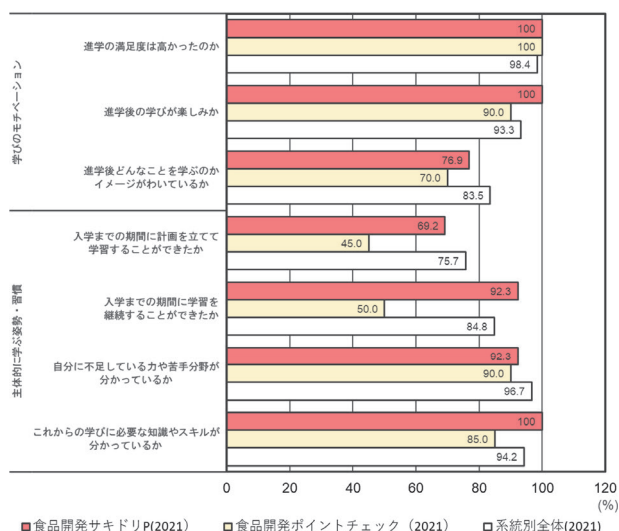


図7. 「見えない学力」に関するアンケート結果比較

食品\_サキドリP(2021)n=13, 食品\_ポイントチェック(2021)n=20, 系統別全体(2021) n数非開示  
出典:進研アド 学問サキドリプログラム受講結果報告データ

らが高い結果は、プログラム受講そのものを受講者が自己の学習成果と意識していることを示していると考えられ、これらの自己像が入学後の学習態度に持続するのかが興味深い。

南九州大学のアドミッションポリシーでは、「3. 態度・志向性」において、「3-①「食・緑・人」について幅広い関心と興味、並びに学ぶ意欲を持つ人、3-②知識や技能の修得に向けて、多様な人と協働して学ぶ意欲を持つ人、3-③地域社会並びに国際社会において、専門性を活かして貢献する意欲を持つ人」と入学者の意欲を求めている。上記の結果から、これら意欲を備えた生徒の獲得に成功していると考えられる。

また、「食品開発科学科」のアドミッションポリシーでは、「主体的に学習する態度を身につけ、次のようなことを探求・習得して社会へ貢献したいという意欲をもつ人を受け入れます。」と同様に意欲を問うている。図8にわからない問題に対する解決方法を問うたアンケート結果を示した。系統別全国平均に比較して本学学生が高かった項目としては、「親や友人に聞いた」(南九州「サキドリP」46.2%、全国平均20.5%)、「わからないなりに自分の考えや意見をまとめた」(南九州「サキドリP」38.5%、全国平均27.2%)という項目が高かった。これら他者に働きかけつつ、自分なりの答えを見出す態度は、学力の三要素の「学びに向かう姿」の獲得であり、VUCAと呼ばれる混沌とした時代<sup>(11)</sup>の学習者に習得させたい学習態度であり、この点においても受講者の「見えない学力」は比較的高いものと考えられる。

なお、入学後、1年生前期のGPA比較では、「サキドリP」受講者の平均は、「ポイントチェック」受検者平均より成績が低い結果となった。これは、「サキドリP」で明らかとなった「学びに向かう姿」の高さが、入学後の試験成績に反映するまでに、短期間では効果を示さないことが要因と考えられ、今後の追跡調査が必要であると考えられる。

吉本は日本とオランダの高等教育卒業者の職業社会

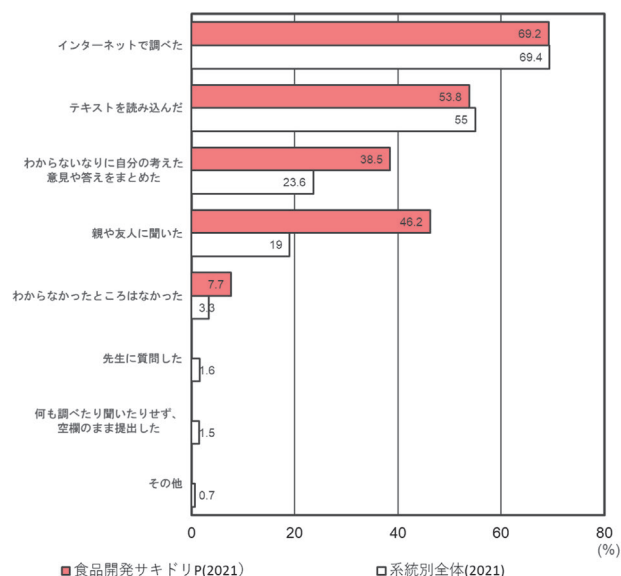


図8. 「学びに向かう姿」に関するアンケート結果比較

食品\_サキドリP(2021)n=13, 系統別全体(2021) n数非開示  
出典:進研アド 学問サキドリプログラム受講結果報告データ

における教育効果について調査した結果、日本の学卒者は「年齢が高いほどヨコ(水平次元で)の対応性が強くなる」ことを示した(吉本・山田, 2003)。つまり、日本の大卒者は職業経験年数が経過することに伴い、在学中の専門分野を職業社会で活用するようになっていくのである。このことは高等学校から大学教育にも当てはまる可能性がある。一般的に、AO入試や推薦入試で入学する学生は学力・知識にて選抜を行う一般入試経験者よりも学力が低いと言われている。しかし、この学力差が在学中、さらには職業社会への移行後も持続するとは限らない。それは大学での学びと高校までの学び形態が大きく違うことが影響している。主体的に学びを進める大学教育においては、「主体的に学ぶ姿勢・習慣」「学びのモチベーション」が学習成果に影響を及ぼす。こうした点を踏まえると、現時点の学力差(成績の差)のみで入学前教育である「サキドリP」の効果を判断することはできない。

## おわりに—入学前教育の今後の課題

大学進学率の上昇によって、今後も多様な学生が入学してくることが予想される。また高等教育の学びの質も大きく変わりつつある。教育現場において学生に直面した時、既存の学力観で一元的に学生を評価することには限界が到来しつつある。

受講者の初年度前期の総合GPAを調査したところ、学校推薦型入試学生間を比較しても「サキドリP」受講者のGPAは低かった。これを早期入学者の特徴と解釈するかどうかは今回の結果からは判断できない。特に「見えない学力」が受講者において比較的高かった傾向を考えると、今後の追跡が不可欠であると思われる。さらには、中退・退学学生との関係、学習モチベーション(例えば、授業時間外の学習時間)、インターンシップ等(授



業科目ではない体験)への参加率, 在学中の資格取得, 就職決定時期, 将来のキャリアビジョン, 学生生活満足度など検討すべき事項は多い。

初年次教育の目的が大学教育についていける学力, 知識の獲得であるのであれば, 入学後の学業成績のみで判断することも可能である。しかしながら, 多様な学びを提供することが今後の高等教育機関に課せられた課題であるとすれば, 大学への期待や大学での学びのイメージを抱かせることであれば, それが大学教育及び大学生生活のどこにつながっているのかを検証することも必要になってくる。

もうひとつ課題は, 「サキドリP」の結果を受けて, 進学可能性がある地域の高校との連携, 特に接続をさらに強化することである。大学に進学するうえで, これだけは高校時代につけたほうが良いというある程度のリテラシーやジェネリックスキルを再定義し, 高校教員と共有し, これに向けた高大接続プログラムを共同開発するという必要であろう。

最後の課題は, 「サキドリP」も含めた入学前に教育の人的・財政的な課題である。これまでの入学前教育は「高等学校における教育不足を補完する」といういわば弥縫策的な発想によっておこなわれてきた。したがって, 本質的な効果検証のないまま, 学科教員の自助努力的な対応によって入学前教育が遂行されてきた。

今回, 「サキドリP」を学科一丸となって試行的に取り組み, その効果検証プロセスを確認することで教育改善の基礎資料ができた。結論から言えば, 今後多様な学生を受け入れつつ学生を教育していくにあたっては, 早期に適切に学生の総合的な学習力を把握するツールは不可欠である。今後, 「サキドリP」のようなツールを全学的, あるいは, より広域的には高等教育コンソーシアムのような組織において導入することも必要になってくると思われる。そのためには, 人的財政的な基盤をどのように確保するのかも課題になると思われる。

## 摘 要

入試形態の違い, すなわち, 早期に入学が決定する学校推薦型選抜および総合型選抜と一般選抜との間において, 学生の学力に差があることが指摘されている。そのため早期の入学決定者の学力補完策として入学前教育が多く大学の大学でおこなわれている。今回, 入学前教育として株式会社進研アド社が開発した「学問サキドリプログラム」を2022年入学予定の早期の入学決定者に試行した。同プログラムの有効性を検証するために, 非受講者には同社が開発した「入学時ポイントチェック」を受検してもらい, 早期の入学決定者と一般選抜学生の両者の学習リテラシーの比較をおこなった。その結果, 基礎的知識を意味する「見える学力」は, 早期入学者が低かったものの, 学ぶ姿勢や学修モチベーションを意味する「見えない学力」については, 受講者において高い傾向が観察された。学問サキドリプログラムは, 早期の入学決定者の学習モチベーションを向上させる可能性が示唆された。

## 謝辞および付記

学問サキドリプログラムは, 2021年度南九州大学学長裁量費補助金教学改革事業(公募型)の助成によって遂行された。

吉本は研究代表者として, 研究の計画, 実施, データ収集とデータ解析に携わり, 原稿執筆を行った。山田は, 研究の計画, データ解析に携わり, 草稿執筆を行った。紺谷, 岡崎, 長田, 矢野原, 永田, 中瀬らは, 研究の実施および原稿執筆において専門的見地から重要な改訂を行った。黒田, 赤木らは, 研究の計画, データ収集とデータ解析を行った。

## 脚 注

- (1) 中央教育審議会(2014) 2頁
  - (2) 中央教育審答申(2014) 4頁
  - (3) 大学入学者の学力・知識レベルの低下については, 1999年後半から, 岡部(1996)らが指摘している。その後, 芳沢(2019)も現在の教育のあり方が「やり方」を覚える学びから脱却できていないことを指摘している。
  - (4) 2015年度の取組状況は, 私立大学の66.3%(354校)であることを踏まえると, 7年間で15.5%増加している。また, 初年次教育は2015年度71.3%から2021年度84.6%と, 入学前から初年次教育に力点をおいている私立大学が増加していることが分かる。データは(日本私立学校振興・共済事業団, 2014)(日本私立学校振興・共済事業団 私学経営情報センター私学情報室, 2022)
  - (5) 高大接続答申以降の大学入学者選抜は, 従来の学力・知識偏重主義から「生きる力」「確かな学力」を多面的・総合的に評価する入試内容に変化してきている。しかし, 入試区分の見直しが行われたが, AO入試と総合型選抜の違いを明確に示しきれていない大学や, 総合型選抜をAO入試同様に, 早期に学生を確保する手段として捉えている大学もある。
  - (6) 日本私立学校振興・共済事業団(2014)は, 入学前教育について次のように定義している。入学前教育は, 「主にAO入試や各種の推薦入試など, 早い時期に合格発表が行われる入試により大学入学が決まった人に対し, 大学入学後の学習のための準備として入学前にあらかじめ行われる教育」と説明している。
  - (7) AO入試, 推薦入試による入学者の割合については, 私立大学ほどではないが, 公立大学でも増加傾向にある。国立大学は2019年度(16.3%)まで増加傾向にあったが, その後, 減少傾向にある。
- なお, 多くの私立大学が実施してきた推薦入試やAO入試に対して, 国立大学協会は「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン」(国立大学協会, 2015)において, 「確かな学力とともに多様な資質をもった高等学校・高等専門学校卒業者の受入れ」として, 入試改革の推進と推薦入試, AO入試, 国際バカロレア入試等の拡大(入学定員の

30%を目標、2021年度入試実績)を掲げている。数値は(株式会社進研アド, 2020), (教育情報センター, 2017), (文部科学省, 2021)から引用。

	2000年度	2010年度	2020年度
国立	10.5%	15.2%	16.6%
公立	16.0%	25.7%	28.6%

- (8) 入学前教育の行政経緯や既存研究について取りまとめた岡田(2021)を参考に、時期と教育内容の2軸により4つの類型を作成した。
- (9) 学問サキドリプログラムについては、以下を参照  
<<http://shinken-ad.co.jp/service/solutions/remedial01.html>>, 2022年9月30日参照
- (10) 「系統別全国平均」は、食品開発科学科と類似した学問系統である家政系大学における学問サキドリプログラム受講生の全国平均データ。
- (11) Volatility(変動性), Uncertainty(不確実性), Complexity(複雑性), Ambiguity(曖昧性)の頭文字から成る語であり、複雑さを増す今後の世界のありようを示す。

## 引用文献・資料

- Trow, M. A. (1976) 高学歴社会の大学: エリートからマスへ。(天野郁夫・喜多村和之 編), UP選書159, 東京大学出版会, 東京  
<<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN00401834>>
- 吉本圭一・山田裕司(2003) 第5章 大学教育の職業社会への関連性- 選抜効果・教育効果・キャリア効果. 高等教育と職業に関する日蘭比較: 高等教育卒業生調査の再分析, 74-103
- 国立大学協会一般社団法人(2015) 国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン.  
<<https://www.janu.jp/janu/voice/actionplan/>>, 2021年9月14日参照
- 学問サキドリプログラム(2020a) スタートBOOK学ぶ力の基礎. 株式会社進研アド
- 学問サキドリプログラム(2020b) パワーアップBOOK生物ベーシック. 株式会社進研アド
- 寺田悠希(2020) 戦後の大学学部名称の変容と趨勢: 学部名称に使用されたキーワードの計量テキスト分析. 東京大学大学院教育学研究科紀要 59: 417-426
- 山本以和子(2001) 特集 FDの再構築リメディアル教育の現状~大学アンケートから~. Between  
<<https://berd.benesse.jp/berd/center/open/dai/between/2001/0708/bet17618.html>>, 2021年9月14日参照
- 岡田航平(2021) <研究ノート>行政文書における入学前教育の変遷と考察. 京都大学高等教育研究 27: 48-56
- 教育情報センター旺文社(2017) 29年度「推薦・AO」入学者、過去最高の「44.3%」! | 旺文社教育情報センター. 今月の視点-133  
<<https://eic.obunsha.co.jp/resource/viewpoint-pdf/201801.pdf>>, 2021年9月14日参照
- 文部科学省(2015) 高大接続改革実行プラン.  
<<https://www.bing.com/search?q=高大接続改革実行プラン&form=ANNTHT1&refig=8eae25b8ed15488bb84eb3e70e6f23f1>>, 2021年9月14日参照
- 文部科学省(2021) 大学入試のあり方に関する検討会議(第27回)配布資料:【参考資料2-4】大学入学者選抜関連基礎資料集 第4分冊(制度概要及びデータ集関係)(その4)  
<[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/103/siryu/1417595\\_00032.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/103/siryu/1417595_00032.htm)>, 2021年9月14日参照
- 文部科学省(2022) 令和5年度大学入学者選抜実施要項  
<[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/senbatsu/1346785.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/1346785.htm)>, 2021年9月14日参照
- 文部科学省 中央教育審議会(2014) 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)(中教審第177号)  
<[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm)>, 2021年9月14日参照
- 日本私立学校振興・共済事業団(2014) 入学前教育. 大学ポートレート(私学版).  
<[https://www.shigaku.go.jp/p\\_dic\\_t043.htm](https://www.shigaku.go.jp/p_dic_t043.htm)>, 2021年9月14日参照
- 日本私立学校振興・共済事業団 私学経営情報センター私学情報室(2022) 私立大学・短期大学教育の現状 教育情報集計報告(令和3年度).  
<[https://www.shigaku.go.jp/s\\_center\\_kyouikugenjyou.htm](https://www.shigaku.go.jp/s_center_kyouikugenjyou.htm)>, 2021年9月14日参照
- 株式会社進研アド(2020) 2020年度私大入学者の56%がAO・推薦経由-文科省の大学調査. Between情報サイト 高大接続改革を知る.  
<<http://between.shinken-ad.co.jp/hu/2020/11/nyushichosa.html>>, 2021年9月14日参照
- 株式会社進研アド(2022a) 「学問サキドリプログラム」の効果
- 株式会社進研アド(2022b) 【株式会社進研アド入学前教育】学問サキドリプログラム 2022年度入学生実施結果のご報告

## 参考文献・資料

- 岡部恒治・信之戸瀬(1999) 分数ができない大学生 21世紀の日本が危ないの. 東洋経済新報社, 東京
- 芳沢光雄(2019) 「%」が分からない大学生 日本の数学教育の致命的欠陥. 光文社新書, 東京